

縄文人はきれいな歯

骨から読み解く当時の暮らし

昔の人はどんな物を食べ、どう暮らしていたのか。骨の研究からなぞにせまる展覧会が東京大学総合研究博物館（文京区）で開かれています。

縄文時代から江戸時代までの人が骨がずらり。とても太い縄文時代の男性の上腕骨や、鉄欠乏性貧血が見て取れる子どもの頭骨、刀の傷などが残る頭骨を見ると、「なぜ」と、かれらの生きざまが気になります。

時代ごとの歯並びの変化にも気が付きます。縄文人は歯のすり減

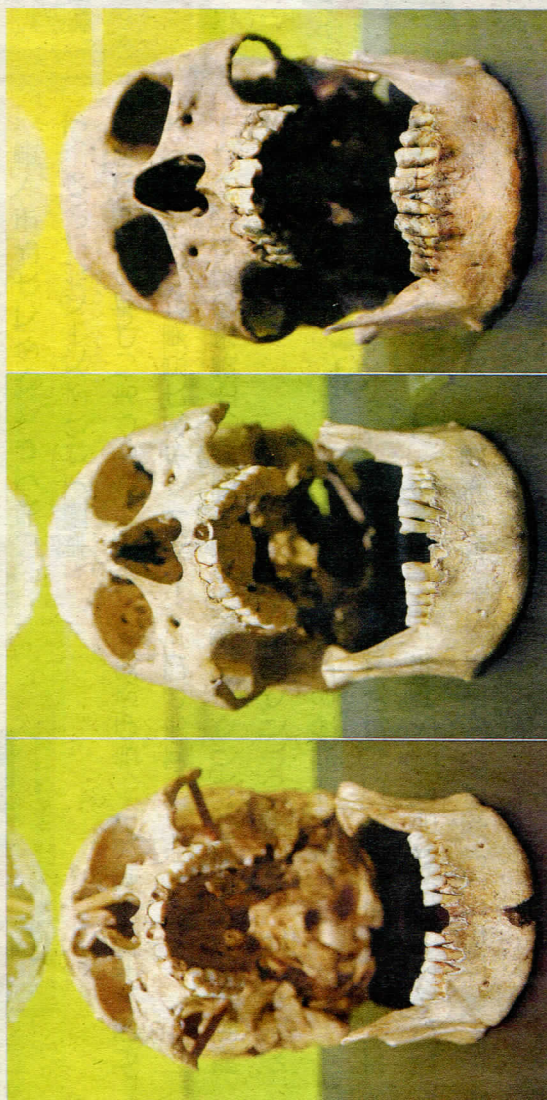
りがはつきりしてきれいな歯並び。よくかむ食生活のため、あの骨の発育が良かったと考えられます。中世・鎌倉時代は出っ歯の人が増加。お米など穀物を食べる機会が増えたのと、はしの使用で前歯をあまり使わなくなったこともあろうでしょう。

江戸時代からは現代のように歯並びの乱れが進みます。やわらかい食べ物のせいで「小顔化」、つまり顔面骨の発育不良が生じ、歯の大きさは変わらないのであごに並び切らなくなったのです。

骨は「生」だけでなく「死」も見せてくれます。お墓の形や場所には今の常識では考えられないものも。話すことできないかれらに代わり、骨が語るメッセージを読み解く体験を、ぜひ博物館で。（海部陽介・東京大学総合研究博物館教授）



特別展示「骨が語る人の『生と死』」日本列島一について説明する東京大学総合研究博物館教授



▲左から縄文、鎌倉、江戸時代の頭骨。歯並びの変化が見て取れる



東京大学総合研究博物館・特別展示「骨が語る人の『生と死』」日本列島一万年の記録よりの音声ガイド。20本に分けて各1～3分の解説を聞くことができる



愛知県の保美（ほび）貝塚（かいづか）から出土した縄文時代の男性の上腕骨④。江戸時代の男性と比べるとかなり太い。漁に出たり石器の材料を運んだり、うでをよく使ったとみられる